

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 72 号 平成 24 年 11 月 20 日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



焼餅地藏尊



やきもち地藏

北区山田町、有馬街道から少し入ったところに「やきもち地藏」という大きな看板があります。やきもちといっても嫉妬の意味ではなく、文字通り、餅を焼くことに由来します。二百年以上昔のこと、村の古老の夢枕に地藏が立ち、山田川に架かる橋を修理するよう告げました。このままでは大事に至ると言うのです。修理に取り掛かると、橋の石垣の下から地藏が現れました。貧しい村でしたがちようど旧正月で、ありあわせの餅を焼いて供えたことから、その名がついたと伝えられています。このお地藏様はいっしか、願い事を何でも一つ、必ずかなえてくれることで知られるようになりました。大正期には既に、弁当持参で遊山がてらの人々が訪れていたそうです。今でも知る人ぞ知る願掛けスポットとして、地元だけでなく京都や大阪など遠方からも参拝者が絶えませんが、お地藏様には餅をお供えし、願い事を書いたしやもじを納めます。秋が深まると、地藏堂の周りの木々が色づきます。願い事の一つ携え、紅葉を愛でながら参拝するのも一興です。

諏訪山動物園ものがたり 戦時下の動物園と子どもたち 豊田和子 立見瑛美（池見宏子）

子供たちに、戦争の悲惨さや命の大切さを伝えるために、史実にもとづいて書かれた絵本。

王子動物園の前身である諏訪山動物園が舞台。主人公は飼育員の兄をもつ雄太くんで、時を経て老人になった雄太くんの回想形式になっている。

第二次世界大戦中、戦況の悪化に伴い、軍から動物たちの殺処分を命じられる。園長や飼育員たちは抵抗し、それを知った子供たちは動物を元氣付けようと貴重なサツマイモを集めて持っていき、思いは届かず処分されてしまう。動物たちは、何のために殺されなければならなかったのだろうか。巻末には当時の新聞記事も載せられている。



神戸地域学 神戸の魅力再発見！ 川越栄子編著（大学教育出版）

全十二章には「神戸のフアッシュョン」「神戸のラジオの佳き時代から現代まで」「多文化共生都市神戸」「阪神・淡路大震災の教訓」といったタイトルが並ぶ。

神戸市看護大学で実施された「神戸学」の講義をもとに、地域のもつ歴史、文化の奥深さの再発見と魅力のアピールを目的に刊行された。神戸を知りたい人、また神戸通を自認する人も、気軽に一読できそうな一六二頁。

平清盛と神戸 ゆかりの地で出会う 歴史と伝説 田辺真人編（神戸新聞総合出版センター）

平清盛と神戸はゆかりが深い。太政大臣を辞任し、出家した後は現在の神戸に住み、都を神戸に移そうとした。

前半は「平清盛散策」と題して、豊富なカラー写真と地図を用い、平家に関わりのある史跡や名所探訪のための街歩きガイドブックとなっている。後半「平清盛考察」は学識者などによる論文、人物紹介や年表が収められ、じっくり読めるように作られている。

チケットを売り切る劇場 兵庫県立芸術文化センターの軌跡 垣内恵美子 林伸光編著（水曜社）

二〇〇五年十月にオープンした兵庫県立芸術文化センターは、二年一ヶ月で入場者が百万人を突破した。これは類似施設と比較して異例のスピードである。

本書は観客や地域コミュニティ、さらには納税者までを視野に入れ、理念、目的、マーケティング、製作プロセスなどの諸観点から多重的に芸術センターの軌跡を解説している。

表紙は、広報のコンセプト「面白くなければ意味がない」から生まれた「音の聞こえるチラシ」の図版。「ジャジャジャジャーン♪」で始まった芸術センターの第一章は十周年を区切りとして、第二章へと続いてゆく。



ぼくの住まい論 内田樹（新潮社） 昨年著者が新築した、自宅兼道場について記されている。

建物には、それを造る人や、そこに住み、集う人がいる。家を持つことには元来興味がなかったという著者の、彼らと場を共有することへの思いが明快に綴られる。

道場は、硬い若芽を育む南風にちなんで「凱風館」と名付けられた。学びの場を母港と考え、帰る場所がある人ほど遠くまで冒険できる、という言葉が温かい。

ひょうごの民話 「ひょうごの民話」再編復刻編集委員会 兵庫県学 校厚生会編（神戸新聞総合出版センター）

いまから約四十年前に、兵庫県の民話や伝説などをまとめた『郷土の民話』全八巻が刊行された。消えゆくふるさとの伝承文化を未来へ伝えるために、県下全域で昔話や伝説・歴史物語などを収集した労作だった。本書はその中からより抜き一冊に編集し直した、兵庫県の民話の集大成である。

神戸の民話としては、「求女塚」や「鹿の夢」「夜泣き石」など十七編がおさめられている。

阪神・淡路大震災における住まいの
再建 論説と資料 阪神・淡路大震
災記念人と防災未来センター資料室
編集（阪神・淡路大震災記念人と防
災未来センター）

人と防災未来センター資料室で
は、十七万点以上の多種多様な阪
神・淡路大震災の資料を所蔵して
いる。本書は、そのなかの「住ま
い」の再建に関わる資料の一部と
論説からなる震災資料集である。

避難所となった小学校で発行さ
れた新聞や運営に関する当時の討
議メモ、仮設住宅でのニュースレ
ター、復興住宅募集の行政資料や
マンション再建時の議事録等が、
七項目に分けて収められている。
翻刻されていない、そのままの資
料が掲載され貴重といえるだろう。
また、付録として、震災資料収
集活動の経緯や、資料閲覧申請書
等の書式も収録されている。



伊川 自然と人のかかわり 流域
6万人のバイオリジション 伊川
流域研究会編・発行

北区山田町の丘陵を源流とし、
太山寺の原生林や西区伊川谷町な
どの市街地を流れ、明石川に合流
する、全長約十三kmの伊川。

本書は、生命と地域をキーワー
ドに流域を各分野の専門家が調査
し、三年の歳月をかけてまとめた
ガイドブックである。

地形や水辺環境、昆虫類や植物
等の生態、農業、歴史、未来像な
どが取り上げられ、伊川流域の過
去・現在・未来を一望できる。

==その他の新刊==

よしこがもえた たかとう匡子 た
じまゆきひこ（新日本出版社）

太山寺の風色―瓦谷博写真集 瓦谷
博著・発行

ふたつの震災―「1・17」の神戸から
「3・11」の東北へ 西岡研介 松本
創（講談社）

韓流ブームの源流―神戸に足跡を残
した韓国・朝鮮人芸術家たち 高祐
二（社会評論社）

豆手帖から 季村敏夫（書肆山田）
水上の家族 澤文字著・発行

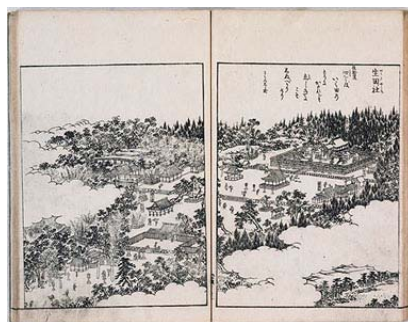
壺の町 望月諒子（光文社）
フクギドウ暮らしの器とこはん―料
理上手の台所から フクギドウ編
（アップオン）

清盛魂が開花した豊かな瀬戸内のみ
なと―マリンリゾートリズム 平
清盛ゆかりのみなと旅 神戸グラン
ドアンカー編・発行

書庫探訪 その28

『播州名所巡覧圖繪』 文化元年（1804）

文化元年（1804）出版の秦（村上）石田（せきでん）編、中井藍江挿絵による五巻五冊の名所案内記。『播磨名所巡覧圖會』とも言います。「播州」「播磨」とありますが、大坂から赤穂までのおもに西国街道（山陽道）沿いの名所旧跡を和歌や古典などを交え紹介したものです。神戸は一卷・二巻に記載されています。図版は「生田ノ社」の部分です。



一卷・二巻のうち摂津国は、秋里籬島（あきさとりとう）の『摂津名所圖會』を参考にしています。今日の旅行案内的なものですが、旅先へ持っていくのではなく、読んで楽しんだのではないのでしょうか。

版元や多少内容の違い三種の異版が存在します。本書の人気ぶりがうかがえますが、その背景にある庶民の他国への興味や好奇心、旺盛な知識欲なども感じとることができます。

復刻版も出ています。また、中央図書館内やホームページ上の神戸市立中央図書館貴重資料デジタルアーカイブズでも一部分ご覧いただけます。

花隈（花熊）城

JR神戸線下り電車に乗り元町駅を過ぎると、山側の車窓に花隈公園の石垣が見えます。石垣内部は花隈駐車場となつていますが、その頂上には天守台のような四方石積み基壇や「花隈城址」の石碑があります。ここが花隈城なのかと間違えそうですが、この構築物は全体が昭和四十四年に高台を崩して造られたもので、これ自体は本来の花隈城ではありません。

花隈城は花熊城あるいは鼻熊城などとも書かれ、天正初年前後に織田信長の命を受けた荒木村重により築城されました。天正八年（一五八〇）、信長に背いた村重を討つよう命じられた池田信輝・輝政の軍により落され、廃城という運命をたどります。わずか十年ほどの短命な城でした。廃城の後、兵庫城築造のため石材が持ち去られたと伝えられ、地表に全くその痕跡を残さない幻の城といわれてきました。

では本物の花隈城はどこにあったのでしょうか。駐車場として造成さ

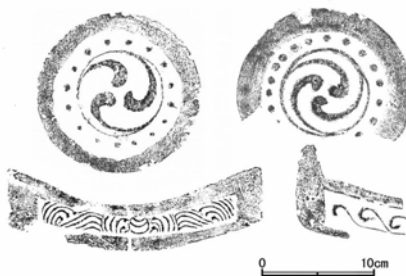
れる以前、ここは花隈城跡だといわれる高台でした。そのため造成工事に先立ち、この高台について表面観察、掘削時の立会い等の検討が行われました。しかし、城の存在を示す遺物・遺構が確認できなかったこと、明治時代、報時球塔が作られた際、大がかりな掘削が行われていること、現地に残る石垣が明治以降のものであることなどから、後代の攪乱により、ここには城としての遺構が残っていないという結論になりました。

ところが近年の発掘調査により、この城に関連すると推測される遺構・遺物が周辺で確認されるようになっていきます。

平成十五年、県庁近くの栄光教会の建て替えにともなう発掘調査で、割つたり磨いたりという加工をしない石材を用いる野面積みとよばれる戦国時代に特徴的な石垣の一部が確認され、その周辺から当時の中国製や国産の陶磁器類・火打石・銭貨などが出土したのが最初です。平成十七年、隈病院の北東近隣で行われた第二次調査では南北方向の溝跡が確認され、平成十八年度、花隈駐車場の南西近隣で行われた第三次調査では、南北方向の溝の中から焼け土や炭とともに十六世紀後半の瓦が二十

八リットル入りコンテナで十箱ほど出土しています。瓦の一部には火で焼け焦げたものがあり、土師器・木製椀・下駄なども出土しています。

ここで注目したいのが、池田輝政の初陣である花隈城攻略の記録として子孫の岡山藩主池田家に伝えられた『撰津国花熊之城図』（岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵）です。



花隈城跡第3次調査で出土した瓦の拓影
（『平成18年度 神戸市埋蔵文化財年報』から）

この絵図によつて本丸・二の丸・三の丸がある城部分は南北九十間（百六十メートル）、東西九十三間（百六十七メートル）の規模をもつこと、城の西に町屋、東に侍町・足軽町があり、いずれも切り岸（崖）や堀で囲まれているという構造を知ることが出来ます。

この絵図は江戸時代に入つてから別の目的で作成された絵図の写しの上に城の様子を書き込んだものです

が、これを現在の地図と重ね合わせてみると、道路や川の位置がよく一致することが分かりました。図の凡例に縮尺が書かれています。図からも元の絵図は単なる見取り図ではなく、測量して作成されたものであると推測できます。

さらに興味深いのが、発掘調査で確認された状況と合致する部分の多いことです。絵図には城の西に堀で囲まれた町屋の区画があり、第二次調査で確認された南北方向の溝とほぼ一致します。第三次調査地は本丸付近であり、焼け土とともに出土した瓦は、本丸にあつた建物の瓦が落城時に焼け落ちたものである可能性が高いと思われれます。

ただ、元の絵図に城の図面をはめ込んだ際に手違いがあつたようで、両者の縮尺等、つじつまの合わない部分もみられます。今後、絵図の検討、発掘調査の成果との対比などにより、花隈城の正確な位置を明らかにできるかもしれません。

参考文献

- 『兵庫県史』三巻付図 兵庫県
- 『神戸市埋蔵文化財年報』平成十五・十七・十八年度版 神戸市教育委員会

『花隈城跡』多淵敏樹 ほか